



漁師のリテラシー

川島 秀一（非文字資料研究センター研究員）

漁師がペンを持つとき

私が「漁師」という言葉を用いて、「漁民」や「漁業者」という言葉をあまり使用しないのには理由がある。漁師自らが、自分たちのことを「われわれ漁師は」と語る時の言葉のニュアンスを、大事にしたいと思うからである。つまり、この言葉にかぎらず、漁師の内面を一度、潜らせた言葉でもって、漁業や信仰について考えていきたいと思っているからである。

さて、その漁師は、われわれオカモノ（陸に住む者）から見ると、ペンやノートには無縁の生業に関わっていると思いがちである。しかし、列島の多くの漁師さんに出会い、話を聞き続けていると、なかには毎日の漁業の状況を手帳に細かに記している人に出会うことも稀ではない。それは「生活記録」ではなく、実際の漁業に役立つよう書き始めたものが大半である。

これまでは、そのような漁業日誌や、山アテ（山や岬の重なり具合で海上の位置を知る技法）などの備忘録を、研究者側は「文字資料」として扱うのみで、それらが、どのような機縁でもって漁師が書き始め、どのような書記方法で書かれ、どのように利用されてきたか、などのことに関しては無頓着であった。文字資料などのテキストは固定されているものではなく、今でも漁師のあいだで書き続けられている。特に、漁師が書くその内容については、聞き書きなどによって得られることなしには、とうてい理解できるものではない。

私は今、これまでの漁村調査などで目に触れた、漁師が自ら書き続けた記録を、再度、整理しながら検討し直す仕事を少しずつ始めている。つまり、それまで私自身が愚かにも考えていたように、聞き書き資料を裏付けるための文字資料として扱うのではなく、その文字と漁師との関わりを、〈書く〉という行為そのものを捉えながら、とことん究めたいと思っているのである（注1）。

操業記録と山アテ

たとえば、北海道の網走市に住む、小型沿岸捕鯨船の元追尾士の福岡昇三さん（昭和12年生まれ）は、昭和46年（1971）から47年（1972）にかけて、A5判のノートに簡単な毎日の捕鯨記録を書き続けていた。ノートには、クジラの発見時刻・命中時刻・発見者・銚数・クジラの体長・性別・種別・食餌内容・捕獲場所・水温・漁期の捕獲順番などが書かれている。

記録する契機になったのは、捕鯨の操業形態が、小型ボートを用いてのクジラのオツカケ（追いかけ）の試験操業を行い始めたことである。その追尾士としてボートの燃料費がどのくらいかかるものか、全体の採算をはかる上でメモを取り始めた。ノートは、操業後の帰港を目ざしている船の中で寝転がってのメモで埋められている（注2）。

静岡県西伊豆町安良里のカツオ一本釣りの船頭だった、長谷川一さん（大正3年生まれ）の場合は、カツオの漁場を一覧表に作ってノートに記していた。「松生場」ほか50カ所ほどの命名された漁場である。個々の漁場にしがたって、緯度・経度・水深・備考という項目が欄にある。備考には「N～S3里 E～W2里」などの、南北と東西の、おおよその漁場の広さを明示している。

ところが、メモの後半には名づけられていない漁場も見られ、緯度と経度だけが列挙されている箇所がある。おそらく、カツオの大漁があるたびに、その箇所の緯度と経度を書いておいたものと思われる。書き込みも若干見られることから、このノートも船上に持ち込まれ、漁場の選定の参考書として用いられたようである。カツオ漁船の計器の発達により可能になった、数字による漁場の記録の仕方である。

船上で良い漁場に当たった場合に、ノートに書き込んでおくのは、山アテの場合も同様である。山形県の飛鳥では、今年になって書かれた山アテの備忘録である「山帳」を拝見した。メバルの刺網に用いられるものである。

もちろん現代の漁師はGPSを重宝にしている。「山帳」は参考程度にしか使わないが、GPSでマークされていないところは、先代が作った「山帳」を当てにする。しかし、この「山帳」だけは自分で書き止め、自分だけの「山帳」を作らなければ身に付かないと言われている。そのために、「船にはノートと、鉛筆かボールペンを必ず持っていくものだ」と語る漁師も飛鳥にいる。

今年になって漁期ごとに分けた2冊の「山帳」を作ったのは、飛鳥の勝浦に住む齋藤久さん(昭和27年生まれ)である。父親の春吉さん(昭和2年生まれ)や三代前の松蔵翁の「山帳」を参考にしながら、自分の目で確かめ、自分の手で書いた「山帳」である。

山アテの記録は文字のみ記述しているものもあるが、飛鳥の「山帳」などの多くは、海上から見えたオカの絵を描いておく。この絵や図を描くということがまた、漁師のリテラシーが発揮される領域である。

カレンダーに画かれた操業図

私は特に網漁について漁師さんから話を聞くときに、その網の形態と操業図を紙に描いてもらいながら説明を



写真1 タイの追い込み網を描く伊藤忠蔵さん(青森県の今別西漁協にて筆者撮影)



写真2 トビウオ網を描く村中正富さん(宮崎県串間市で筆者撮影)

してもらうことがある。私の採集ノートに描いてもらうこともあるが、むしろ漁師さんの方が複雑な網漁の説明に窮して、自ら立ち上がって紙と筆記用具を持ってくる場合が多い。

ここに掲載した2枚の写真の漁師さんは、上が青森県東津軽郡今別町の伊藤忠蔵さん(昭和6年生まれ)、下が宮崎県串間市毛久保の村中正富さん(昭和3年生まれ)である。伊藤さんにはタイの追い込み網を、村中さんからはトビウオ網について描いてもらった。村中さんは網の修理中であつた。それまで網針を船に見立てて説明をされていたが、とうとう私のノートに描きながらの説明となった。

これらの例のように、漁師さんに描いてもらう図は客観的な資料としてよりは、操業に携わる漁師がどのように自分たちの網を見ているかということを知るに価値の高いものである。

伊豆諸島の新島の石野佳市さん(昭和22年生まれ)に大掛網という追い込み網を初めて聞きに行ったときは、事前に連絡をしていたためか、カレンダーの裏紙を何枚も用いて、サインペンで網の操業の順番を描いてくれていた。秩序立って話をしたかったためだという。さらに石野さんは「このようにして大掛網のことを話したのは初めてだ」とも語ってくれた。自分たちの漁業を客観視する機会を与えてしまったことにもなるのだが、そういうときにも漁師のリテラシーは発揮される。しかし、海中の網に対する空間感覚のようなものは、図で示されてもオカモノにはなかなか理解が不十分なときもある。

現代の漁師は、漁場の選定や山アテの技術のほかに、機械操作の技術、それから「記述体系を理解し、整理し、活用する能力」という広い意味でのリテラシーも職能として身に付けている。これらを総合的に把握することで初めて、海という自然に向き合っていた漁師の考え方や生き方に触れることができるものと信じている。

新島の石野さんからいただいた何枚ものカレンダーの裏紙は、今でも丸めたまま、宝物のように保存している。

注1 このような方法、特に〈読む〉という行為に関しては、ロジェ・シャルチエが『書物から読者へ』(みすず書房、1992)や『書物の秩序』(ちくま学芸文庫、1996)の中で魅力的に展開している。

2 このノートの意義については、「追尾士の捕鯨記録」として、近日中に発表予定である。